



語意考
全



語意序

いふやうなものはまゐるもの
 であらう。その書も（か）の
 うなものである。人々も
 ねほほしくあつてゐる。
 丈夫な多うな人種であらう
 書いもぬきぬきのうた

と見えし人なるをいひて
半縣古老なるのむすはるる
ものなるよしとていふもの
おや此ゆゑなりといふもの
せしむる一なる母なる年
ろくしき一なる母なる年
をみちなる書いし人西に

ういふものなりといふ
板本なるものなりといふ
ききしものなりといふ
一なるものなりといふ
ふものなりといふ

本店営業

語意考

むし

出 五十聯 音 言
あはれの日いづる國はつらけしあはれあふくをな

萬 口
くさぬ川に事成るをいつういひはるるにたれ

放 繪
日さかる國を美しめるふかき平草をさるる

國ありかき日入る國を 五十聯 許 繪
天生とふ

城書くふりし事ふわう一用は國なりあつたれ

此國ふのむかき字用さる孤影ふ人あるいまさる

多るふそといふて日ある國人ハ巧きからるを好む

中
 理

夢をばぬくはゆい？ うれしきよりこの

五
素より此きるはさるあり日の
入國なる也

水子好むにても喜を懐くちふ

なれはあとかて平用りめまされとまたいひな

からた音のうきうき 萬にふたふた せうせう

海を
 舟に
 乗る
 所
 あり
 の日
 物
 成
 る
 も

人の心はなれ、事おく云ふおもひくすけ

るも云ふがあらは、或る人ある志の時

天つちにおのゝなるいつは音のこゝろ

たそそへ
何れなるか
孤待とよの
辛たそめ

あつたをいふに
きこはれぬ

なりては、
ふりかへて
みれば、
さうして、
また、
此のたう

言語
おのゝこ
こゝろ
ぬち
アツチ
地のち
り
れ
ぬ
あ

かきくけこ
さしすせそ
コエ
たてふとろ
はひふへほ
まみむめも
やゆよ

時代をもつたもの國のふりかへもあつて他國

はうろ考られ

ばさぬも勢も

とち約さぬ

くにく中ふ

甚むうくを

りたもあれ

をまかいたの

つゝあつてい

しもの人毛那

はふれ天地のふ

のからふたれ

人の國のふ

信ふはふ

るふあふ

そのあふ

おふのふ

ふつふ

ふふふ

の事平なふくふさうりくふふの目れ人ふふふ

ヨハリタ

ふ小治田の宮ふ始りてふふふふふふふふ

頭

習

カルシマ

のせありたふふ前田放る國のふふふふふふ

まゆ上つ代ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

なりけるふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

コト

ふふ人のふふふふふふふふふふふふ

ふふのふふふふふふふふふふふふ

コエ

カタ

トキ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

故

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

タテ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

言

初

音

言

體

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

言用

言

令

日本記を業との外に古書の假字均くは新撰

字後和名抄よりふとてとるべき和名抄よりとる

漸ふむとて出でて逐ふむとてとるべき古書とてとる

とる人あるに守人と雖も又とてとるべき古書の

中にわたりしはふるといふとありしをきりしもの

初めとてとるふに用初とてとる後とてとるなりとて

とてとるなりとてとるなりとてとるなりとてとるなり

とてとるなりとてとるなりとてとるなりとてとるなり

とてとるなりとてとるなりとてとるなりとてとるなり

とてとるなりとてとるなりとてとるなりとてとるなり

とてとるなりとてとるなりとてとるなりとてとるなり

とてとるなりとてとるなりとてとるなりとてとるなり

とてとるなりとてとるなりとてとるなりとてとるなり

とてとるなりとてとるなりとてとるなりとてとるなり

とてとるなりとてとるなりとてとるなりとてとるなり

とてとるなりとてとるなりとてとるなりとてとるなり

世園ふかき

いかりおれ

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

いんぎも月あす

子

[illegible]

しくはうにまどやかんは御名をうけり奉

るにやほされおかれとのかき^{イッウ}五十九職

中の表^ヲ於衣意^オ以考の事^コも定^イむ^ハ別^ニありてか

あ^ハでい此國の^ニを^ニた^ニう^ニなり^ニあ^ハり^ニお^ハり^ニる^ニなり

る^ハか^ハこ^ハう^ハた^ハの^ハな^ハく^ハち^ハる^ハう^ハい^ハふ^ハる^ハか

え^ハより^ハた^ハの^ハ御^ハ名^ハを^ハか^ハけ^ハお^ハ意^ハハ^ハ平^ハ政^ハを^ハ於^ハ保^ハの^ハ畧^ハ

計^ハハ^ハ和^ハ計^ハの^ハ略^ハを^ハ大^ハ別^ハの^ハみ^ハと^ハち^ハる^ハの^ハ弘^ハ太^ハ神^ハを^ハ

か^ハの^ハ意^ハを^ハし^ハい^ハ小^ハ門^ハの^ハみ^ハこ^ハら^ハる^ハこ^ハに^ハ決^ハ定^ハと^ハ意^ハ保^ハを^ハ

弟^ハと^ハ弘^ハと^ハ中^ハか^ハな^ハり^ハか^ハの^ハ家^ハを^ハ吉^ハ師^ハの^ハ明^ハ義^ハを^ハり^ハ人^ハ

候^ハを^ハ破^ハり^ハる^ハに^ハ古^ハと^ハも^ハち^ハの^ハ私^ハと^ハ別^ハり^ハた^ハに

言^ハ古^ハと^ハ書^ハの^ハ能^ハを^ハと^ハば^ハみ^ハち^ハり^ハ能^ハひ^ハる^ハを^ハや

と^ハと^ハ候^ハに^ハえ^ハる^ハの^ハ味^ハを^ハあ^ハる^ハま^ハく^ハね^ハ何^ハゆ^ハに

か^ハの^ハ字^ハ彙^ハお^ハり^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハれ^ハる^ハの^ハを^ハ

ち^ハを^ハふ^ハ用^ハる^ハ

字^ハと^ハて^ハふ^ハ方^ハに

千^ハと^ハ出^ハせ^ハる^ハ天^ハ空^ハ

の^ハ悉^ハを^ハと^ハ十^ハ

の^ハ字^ハを^ハ見^ハ教^ハ

の^ハ半^ハ條^ハを^ハ

を^ハか^ハり^ハは^ハ字^ハ

巴達達

あつちのうをいふ

我親とて
 宗もくれば
 老子既世國
 古のたうい
 此如き証
 外も天の下
 比ふのたう
 うりい
 又その時
 かう文と
 かの孝子
 こそあふ
 王主と
 收控して
 けり
 圓小邪
 う

世もくはの
 伊門良乃
 古惠と訓

五十聯

伊門良乃
 古惠と訓

阿伊字延表
 本音

加幾父計已
 清濁二音

佐志須世曾
 同

多知門天登
 同

奈仁奴禰乃
 清音

波比不反保
 清濁二音

麻美武米毛
 清音

也伊由衣與
 同

良利留例呂
 半濁

和為字惠於
 清音

初體用今助
 初體用今助

右の堅の音は喉舌牙齒唇のふち○阿行ハ聲と
引も他へ轉ることなり 加行より下れ音ハ聲と引ふ
皆各阿行の本音へつれとなふ阿行をぬく 他
成語子とるころなり ○阿と延く伊加二音と成る
よる延きハ教百七音と成るを又未ゆ約めのが
れぬふ阿一にふはるよし事ならぬとせるに
と今世人皆をく理りも明らなれぬなりいざ
是より阿行より始て世にいひあつぬるはなす事

と次ふ專ら 核韻ハ此圖のふと用ゐる例を正しく
せり

○阿伊字延き同行と和行といふより通りふ
あれと加行より下れハ行ハ延き下れ

○阿の同行を延きハ字都々と字都々 現字音と
字音 萬事ふかすといふ事字音より 以奴と惠奴也
字音と用ゐるといふ事 噓ふといふ事

字佐藤と字佐藤

○阿行と和行の相違ふ阿れと和れ 阿多里と

為居井

登々々々多

の
都

まゝ也行の伊とて試る

○毛伊ハ、ゆりよと、
勤キ、旅伊ハ、
松ヤ、歌ふと、
勤キ

臨

と動さ多延ハ多由多也須と動く数数へ

の伊ふあひ

○孝阿行と和行の趣も異なり

にあらず必おぬしの事多し和行を為す也

此字五字和五
勤五須惠須字須和

古志
 物志
 古志

なれ^{ヨソカ}いり^{初め}ふさ^{さき}や

こなたすゑとあはれと一書とて
人よすゑふおほき言のこすゑらけ

もえこくにき

とハきり

ウエカキエ

○幾志知仁比美伊利為と歌音と名づくも^冠つかぬ

といひあひさといふ歌ふ其おと定む時の^扇云々此歌志

知仁^{コエ}の音^{コエ}方^{コエ}乃云々^{コエ}てふ^{コエ}時^{コエ}い^{コエ}る^{コエ}定^{コエ}りて^{コエ}歌

守其云歌お^{コエ}う^{コエ}て^{コエ}定^{コエ}ま^{コエ}る^{コエ}の^{コエ}に^{コエ}二^{コエ}ふ^{コエ}と^{コエ}れ^{コエ}

○久須門奴不武由留宇^{ウエカ}歌用音と名づくた^{ウエカ}と^{ウエカ}た^{ウエカ}と^{ウエカ}

るかぬ^{ウエカ}と今^{ウエカ}か^{ウエカ}づ^{ウエカ}と^{ウエカ}う^{ウエカ}づ^{ウエカ}と^{ウエカ}い^{ウエカ}ひ^{ウエカ}扇^{ウエカ}と^{ウエカ}歌^{ウエカ}用^{ウエカ}音^{ウエカ}

あ^{ウエカ}か^{ウエカ}と^{ウエカ}い^{ウエカ}歌^{ウエカ}ひ^{ウエカ}る^{ウエカ}物^{ウエカ}れ^{ウエカ}と^{ウエカ}さ^{ウエカ}と^{ウエカ}い^{ウエカ}云^{ウエカ}と^{ウエカ}あ^{ウエカ}れ^{ウエカ}云^{ウエカ}と

い^{ウエカ}の^{ウエカ}れ^{ウエカ}下^{ウエカ}に^{ウエカ}る^{ウエカ}時^{ウエカ}た^{ウエカ}と^{ウエカ}い^{ウエカ}り^{ウエカ}腕^{ウエカ}の^{ウエカ}定^{ウエカ}り^{ウエカ}て^{ウエカ}は^{ウエカ}よ^{ウエカ}歌^{ウエカ}

け^{ウエカ}い^{ウエカ}ふ^{ウエカ}と^{ウエカ}れ^{ウエカ}と

オフスルコエ

○計世天祢及米衣例惠と今音と名づくた^{オフスルコエ}と^{オフスルコエ}か^{オフスルコエ}と

あ^{オフスルコエ}け^{オフスルコエ}い^{オフスルコエ}る^{オフスルコエ}の^{オフスルコエ}歌^{オフスルコエ}ひ^{オフスルコエ}と^{オフスルコエ}是^{オフスルコエ}と^{オフスルコエ}云^{オフスルコエ}の^{オフスルコエ}下^{オフスルコエ}ふ^{オフスルコエ}司^{オフスルコエ}の^{オフスルコエ}時^{オフスルコエ}人^{オフスルコエ}と^{オフスルコエ}い^{オフスルコエ}

頭^{オフスルコエ}す^{オフスルコエ}る^{オフスルコエ}と^{オフスルコエ}あ^{オフスルコエ}の^{オフスルコエ}言^{オフスルコエ}歌^{オフスルコエ}動^{オフスルコエ}き^{オフスルコエ}て^{オフスルコエ}今^{オフスルコエ}す^{オフスルコエ}か^{オフスルコエ}と^{オフスルコエ}は^{オフスルコエ}よ^{オフスルコエ}あ^{オフスルコエ}の^{オフスルコエ}

○表已曾登乃保毛與呂^{オフスルコエ}於^{オフスルコエ}と^{オフスルコエ}助^{オフスルコエ}音^{オフスルコエ}と^{オフスルコエ}名^{オフスルコエ}づ^{オフスルコエ}く^{オフスルコエ}是^{オフスルコエ}ハ^{オフスルコエ}万^{オフスルコエ}川^{オフスルコエ}

の^{オフスルコエ}云^{オフスルコエ}れ^{オフスルコエ}下^{オフスルコエ}は^{オフスルコエ}は^{オフスルコエ}き^{オフスルコエ}其^{オフスルコエ}言^{オフスルコエ}の^{オフスルコエ}現^{オフスルコエ}り^{オフスルコエ}云^{オフスルコエ}ら^{オフスルコエ}成^{オフスルコエ}ハ^{オフスルコエ}た^{オフスルコエ}と^{オフスルコエ}い^{オフスルコエ}

他ハ阿行と除
てゐるに
のこ表とさる

Handwritten notes in the top right corner, including the date "1906" and some illegible characters.

○ 1906年10月10日 星期日 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

Handwritten notes in the middle right section, including the date "1906" and some illegible characters.

○ 1906年10月11日 星期一 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

Handwritten notes in the middle right section, including the date "1906" and some illegible characters.

○ 1906年10月12日 星期二 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

○ 1906年10月13日 星期三 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

Handwritten notes in the middle right section, including the date "1906" and some illegible characters.

○ 1906年10月14日 星期四 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

○ 1906年10月15日 星期五 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

Handwritten notes in the middle right section, including the date "1906" and some illegible characters.

○ 1906年10月16日 星期六 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

○ 1906年10月17日 星期日 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

○ 1906年10月18日 星期一 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

○ 1906年10月19日 星期二 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

○ 1906年10月20日 星期三 晴 風和日麗 遊園會 遊園會 遊園會

Handwritten notes in the bottom right corner, including the date "1906" and some illegible characters.

かゝれども
あられも
よも
ハ保云とあり

なりやハ俗言ハ用と體ふいひるす物なり保云
のこされる人々文の訓ハ行乃時りるれ時なり
保云保云あり

○保ハ云の中よりそ物辭やハ保云す事云ふ
いそんじやとく教ひのまじり

○元ハ物のまじりひそ保云時そ教なりとく
又か毛那元也元とく教のまじりけしとるそ元

○興ハ云々^{オウフ}今云ふるそやめなるの教ひく又保
某とるといふ教なりとるそやめなるの教ひく又保

してあふのや我ハ元やこれやとく
轉あり

○呂ハ云々ばりかれとるあふそるなるのそ物辭
あり又そふありとわねとくそるなるのそ物辭

○於ハ下にいそめとたふそ物辭ありとあふなるの
保のや

○初言體言用言今云助云と二言ふと類

○老い紀ふ老此曰於申といひし義ある於候まに於てと
あれ也行の候にあれと義ある於てととみし
候とあれの也あれはよあねの候れや平云と
る

○おえのえち由計の約をむけと令すり云時次の
りえも均

○萌^{モエ}いふゆえとささくは常く万葉よとゆの候
候はともよみされも也行ふ入におとと持と

りふよとらふーと今の新よえといふえ由計の
約をえはふききりゆえといふ

○すさくすさくもらふー和良の約われさう
國もさくー我々の内
とふ

○須為の爲も和利の約われすさく

○須惠、積ふ用ふわうとされおたひふわれの

それわれと今云ふる
於衣毛衣れ敷
今老 今萌

○須於例の平云平云思き轉りふよのあれ

同上

坐植餓
惠字惠字
和行

類

加行
予之 将

子云上
不同下
均

流
なかし
なうす
なうせ
なうれ
なうと
なうさ
なうせ
なうと
なうと

なぐれ
なぐれ

まゐり
 まゐら
 まゐるひ
 まゐうー
 まゐり
 まゐらす
 まゐるぢ
 まゐふ
 まゐるを
 まゐあぬ
 まゐあめ
 まゐせ
 まゐと
 まゐり可

天
天

東
つふ
つふ
つふ

つね
つふ
つふ
つま

つゝめ
つゝせ
つゝあ

つうの
つう

つゝの
つゝの

[illegible]

あひか
あひか
あひか
あひか

麻行

あいまん
あいまん

あいまん
あいまん
あいまん

あいまん
あいまん
あいまん

あいまん
あいまん
あいまん

あいまん
あいまん

也行

まやん
まやん

まやん
まやん
まやん

まやん
まやん
まやん

まやん
まやん
まやん

まやん
まやん

良行

るん
るん

るん
るん
るん

るん
るん
るん

るん
るん
るん

るん
るん

和行

さるん
さるん

さるん
さるん
さるん

さるん
さるん
さるん

さるん
さるん
さるん

さるん
さるん

本音といふ言
の振替は
いふ

○ん^東つねと

あう約言もろい福とふはあふせりふも思

ふふせふあふせりふも思ふつふふふふふ

つねふふふふと

福の約
あふれ

○あふのふ

ふつねとふふふふふふふふふふふふふふ

あふ約を今ふふふふふふふふふふふふふ

ふ次れふふふふふふふふふふふふふふ

もふふふふふふふ

○ふふふふふふふふふふふふふふ

是をわにせり
あともなき
うゑてまは
はるる

阿の釣糸
多と成故
候共
也保
多布
五と
是

是も思ふよりやと云ふも、
物乞の例ふよりて、必し保多布みとかざれども、
ぬきあり

○行知布ユクチフ
意知布コフチフ
萬葉ふるハ行とイテ意と

布といふるを登トイ以て納ナむ知チて成ナるゝ志シある

今、京にありては、その知と成不難にて
布と云ふも、東國に之をちせしと云

○和布と糸ニキタは多倍ニキタよりその多倍タと約めて糸ニキは

テ
取
し
て
下
す

糸は、調ひてはうきと
多倍、布の数をとては名をう

○我妹と和莖毛草と_ハ和賀伊毛古の加賀伊の

納め執事此の如く
百千と爲る事

本言の濁る、延納と不濁を
主語濁すてハカキル

○イヒ 昭の帝と其の納めし紀伊伊比牟婁とを伊

比ヒ尔ニ尔ウ之エ也テ之ヲ草木マダ孤コ棲セ之ヲ也トのノこノもモ共ニ尔ニ

あやゆめを
伊夜^{イヤ}と夜布^{ヤフ}保^ホと保^ホといふ歌^カ

高
 於
 中
 上
 是
 未
 八
 界
 不
 有
 便
 約
 之

^ニ尔と^ニ魚の^{マ、ニ}可^ニ尔ち^ニ云^ニあり^ニ魚の^ニを^ニ納^ニめ^ニ

ハッ
ツ
ン
チ
ン
と
あ
ふ
た
り
に
な
る
か
ら
い

ある故に轉^レなり^ニ良^ク万^ノ通^ルたの可^ク也

言ふにめう
 尔ハ
 禱
 下
 の
 や
 ○
 夜ハ
 須我良

糸と
 糸の夜ハ
 佐ナ サナ
 我良糸ナリ カウ
 此佐ハ サ
 志カ シカ
 の物

あると酒ふたり通り
奈⁺ハ酒奈の
約束佐とる

あふはふ須はふ事上の言をふに

同 良平の本の如し
秘建ハ是もそのまゝ云ふ

東の紙を便ふより
志みをもす
るをも
とす

○志加志奈ふ良ふと一たつめて志加須ふと

いふに、佐領我より其に、
約二カ只志カ

ハ本れゆくはのこもくと云
次^ノの志を成

かまのえれちとあるは後よりいふ事の時とせしけれ
とすくサシつるあつしは平聯のちよふあつとせしる
既もいふやく天地のいさ
しるえれちのめあつなり

○延言

ちの約えいそのえせくしていひつけ延言時約

めいし世延言を延くしてさえつてせしる時

延ていふなる由都以收年良と唱るは伊保の

約えあつと同音の由え轉して
陽清凡格陽清
杜そのいひあつと

○字良吏れ和備小同して字良の約え和吏

れの約え倍あつと備小轉して和倍とせ

○抑てのりふふ命乃良万止とるみと乃良

武止とるえあつと武とるふ轉して

○是万志由加万志とる是武行武とるといふと

是も万と武を轉して西つていふ下の志いふ

の思ふと志まハ
シケキ 繁とるえと下み信と其えと

強うしむと事記
ケカシキクニ 釋意用とる是也且

ていふれとるし然とるえと略と

○ 畧言 ハダク

○^イ_ハおと倍上^ヘ_ニ倍道^{ミナ}_ヲ知石^チ_ト志子^シ_ノ親^{シン}_ノふさ

○^ナス^ナすくあるの成ほう又良きなりといふ

る多きを延てふ良久の多きなり
 のゆめあり
 あむむ
 さのむを延て阿波久
 とまふなり

ありとあり 万々の 世外花ちるを花ちるる
をうるるをうるる は 皆延とを 是 是き は 延る

ねど皆、是れ其のこ

○二、延るゝ美禁一不家告用とゐる家とあり

しのれと延く良閑とのまへそたの敷く
 良閑の物名告依根とあるまのれとよれと也
 而れに

下條今に
 お昔因とて
 とくを訓
 しなも訓
 法もく
 〇きふとの
 とく古の

ウツシメグアシカヨフ

○轉回通

○紀業系
若箇秘名とあるは、いふに、えむ
ふ云々するも、くさくに思ふ

○うくさやあふをいへる満をいへるな
とて思ふ人もある

○トと畧ハ天と^{アメ}一の^{アシ}鳥を^{トキ}一の^ト時と登々云々

○^{カミ}と^ム思^ムく^ムも^ムく^ムる^ム○^ム依^ム我^ムの^ム國^ム年^ム依^ム斯^ムも^ム也^ム毛^ム

西北の國はあはれとて多と分ちて車ふちよふりてすきて身ム校サ
東北名は流石ふ多しあつて其の身校の名より國の名と成ナく

夫良教が世に
 義理の字を用
 一り実を失
 ひる人知を
 の説をよみ及
 づ

卷之六

[Handwritten text in Arabic script, likely a continuation of the previous page's text.]

○十二月の終り迄西郷家へ
○一月を全くとす

都月 乙未（其先都の孫、年五十五）

○二月を依キ依カ皇ミコ皇ミコ月ツキと云ふ依キ依カ依サ依サ月ツキノ字ナ

○ 戒は出ず、二日、一々依^ナ依^ナの二家^ナ能^ナに依^ナ

其^ナに依^ナと^ナも^ナ又^ナに^ナ又^ナに^ナ又^ナに^ナ一^ナ依^ナ

○二月、也子比世三、特其伊家出、イヤカニ三也子比世。

此乃不孝之徒，
 大不孝也。

五言古詩一首

○六月五日、^{あつ}_た和太女が産む。

己十月，陸月之四日。○

此後之世
 亦必如是

on there for ever no

[illegible]

○清濁と通りいふ例

○五十聯言のけふ加久計已をガギ解ゲ期ゴと隔る

仇志須世雪とサジスゼ自定を俗と隔る多都王登と

右ダチゲ野デ杵ドと隔るは比布用保とバビ備ベ丈ボ便ボ凡ボと隔る

るは二十言の隔るありまはと隔るは云の本別あり

おまはと合さく七言かて万言の云ふ本より隔る

るま云便の隔るまなう隔ると隔る隔る延約

るもいへ隔る便の隔るがうぐえしと隔る

いへま本は音うれがのいへる隔る隔る

言便の隔る多うたけふ本より隔る隔る

おまふ例をまうたはは隔るの隔るは後世例

いへま本は音うれがのいへる隔る隔る

はされたふ奉

○堅備丈便凡の隔るを云くまは云く羊也の隔る

ていへまそのはの歌ふ本はの隔るを云く鳥麻

能始於保はの云を新徳磨故と云又たうは云

大昔子

天竺より来りて
其の音も
云々
其の音も

多々女倍磨ふりこゆれはつと赴陀利古喻例磨
ふとすうせふ神子備と外ふかま利と如き
利須陪良磨を須牙良磨比凡を比母子とあまに
り敷とあまに

○世^ガ自^ジ受^ズ是^セ俗^フに奴^ヌ泥^ニ乃^ノとて^ト了^リた^タと^トい^イふ^フ不^フ知^チと^ト石^シ果^カと

意^イ志^シ良^リ自^ジと^ト了^リふ^フ万^{マン}葉^{エフ}の^ノ頑^{ガン}受^ズと^ト奴^ヌ又^{マタ}不^フと^ト奴^ヌは^ハ是^ゼと

と^ト彼^カ称^{ショウ}を^ヲ急^{キウ}出^{シュ}る^ルと^ト了^リふ^フこ^コ是^ゼと^トこ^コね^ネお^オと^ト交^{カウ}合^{カウ}す^ス色^{シキ}

○^ダを^チ作^ヅ人^デ傳^ド士^トと又^カ素^ダに^シ奴^カ保^チ乃^シ小^カ越^チり^ナ加^カを^ダ志^シ如^カ素^チ

志^カ合^ダ僊^チ金^シ倍^カ太^ダ知^シと^ナ閑^カ奈^ダ里^シ滿^カ乃^ダ桑^チ多^カ治^ダ比^シと^ナ丹^カ比^チ

エとよ

ふより

少も古ハ多クふひふあへ
但る舟波
 五匹と丁奴又
ふふ場の
まど利りい
主本志腹
 奴傳又ニテと奴祢
記めつてゆらくしとをい
腹音のうこ記ゆとく
 於柿オドレれ於オノ不

礼レ罵ト於下通トすト云ト於下乃ト久ト同

○我^ガ我^ガ愚^グ解^ゲ其^ニを良^リ利^リ属^リ例^リ偏^リと^ニ至^スふ^ニ我^ガと^ニら^ニ芝^シ三^ミの^ノ表^ハ

う我^カちと一良^ラつ多^キ鹿^シと多^リ利^リをいの山^ノ中^{ナカ}へて所^{トコロ}とまゐる

且さあのみ、
方（必）なる
ふ擬と布利
純糸糸拵
忍ぐと忍ぶ
味の忍ぶ

しへ^グ々^とへ^ろ減^ユ由^ゲ解^とり^れば^けけ^ら解^の約^に止^ユす

まことと云ふ一まに ^最和期と和名 ^{我といふ} ^{りやうと云ふ}

○古をかくはなとてつる付ら馬頭武末丹 ^{其言はまむの} ^{後言はまむの}

儼尔若栢廼 ^{其言はまむの} ^{後言はまむの} ^{これ外にえん} ^然 ^{せん} ^本 ^の

教是度二言ちと ^{其言はまむの} ^{後言はまむの} ^{これ外にえん} ^然 ^{せん} ^本 ^の

つる司の匠は社と付ら ^{其言はまむの} ^{後言はまむの} ^{これ外にえん} ^然 ^{せん} ^本 ^の

乃小用を云ふ

○青陽の云ふ事紀事紀事此の云ふ事と訓は

陽云ふ陽字と云ふ是を云ふ又云ふ陽字と云ふ

陽字乃字と云ふ新いあれとは云ふ陽字の字と云ふ

は云ふ ^{其言はまむの} ^{後言はまむの} ^{これ外にえん} ^然 ^{せん} ^本 ^の

○言便の陽の二云と云ふつる所は必ありとも又海河

山河我人なるの云ふ故は云ふ故にぬる陽字と云ふ

山云ふの云ふ事と云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ

云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人

又云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人

云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人云ふ人

へま今の刻み字と交す

○は紙ふ多くは古書なる例と考へるにあらはけ
まづて考ふるに皆よりふをめぐりて人々思入り
て考ふるも一二のて考てやまぬ細事ばあはれは
されど紙多しと思ふことなるは

[illegible]



